OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

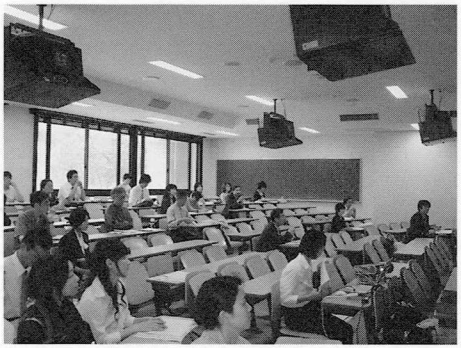
Title	大阪大学古代中世文学研究会第二〇〇回記念例会の報告
Author(s)	
Citation	詞林. 2008, 44, p. 92-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/67590
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学古代中世文学研究会
第二〇〇回記念例会の報告



本年六月の例会をもって、本研究会の例会開催が二〇〇回の節目を迎えました。一九八七年四月十七日の第一回例会から、足かけ二十二年にわたり、活動を続けてまいりました。六月二十八日にその記念の例会を開催しましたので、ここにご報告申しあげます。

二〇〇回記念例会は、通常の例会とは趣向を変え、荒木浩氏（大阪大学）、中原香苗氏（神戸学院大学）、福田安典氏（愛媛大学）、村山識氏（大阪大学大学院（院））の四名の会員にご発表いただきました。また、安西法師の顕彰に尽力されてこられた、愛媛県大洲市の寿永寺御住職小島泰雄師をお招きし、『安西往生図』（寿永寺蔵）の絵解きをしていただきました。また、会場には『詞林』創刊号から最新号まで、計四十三冊及び『古代中世文学研究論集』の展示を行い、研究会の歩みを振り返りました。

本研究会の設立者である伊井春樹先生（国文学研究資料館館長）にも、万障を繰り合わせてご臨席賜りました。また多くの会員、また会員以外の方々にもご参集いただき、二〇〇回記念にふさわしい華やかな会となりました。

以下に、当日のプログラムおよび、荒木、中原、村山各氏の要旨を掲載いたします。尚、福田氏にはご発表をもとにした論考を今号にお寄せいただきましたので、要旨は割愛いたします。

例会の最後に、伊井春樹先生にお言葉を賜りました。その一部をご紹介させていただきます。

本日は二〇〇回記念ということで、本当におめでとうございます。二〇〇回ということでお声がかかりましたので、出て参りました。二〇〇回というのは大変に素晴らしいことだと思っております。私が辞める直前の（二〇〇三年）三月六日、一五七回目がございました。そこから五年、今日、二〇〇回を数えるわけですが、これは荒木先生、加藤先生のご尽力のお陰と敬服している次第であります。

初心忘るべからず、という言葉がありますが、時々は初心を忘れなくちゃいけない。忘れて、そのときどきの状況で発

展をしながら、また初心も忘れないで振り返る、ということが大事だとつくづく思ったりいたします。

今、さまざまな思いが去来しております。しかし、私のことなどもう忘れていただいて、益々の発展をしていただければ、陰ながら私は喜んでおります。本日は本当におめでとうございます。

初心を忘れることなく、同時に刺激に満ちた研究の発信を目指して活動を続けてまいりたいと考えております。（石原）

〈当日のプログラム〉

日時　二〇〇八年六月二十八日（土）　午後一時～

場所　大阪大学教育実践センター講義棟Ｂ棟118教室

開会の辞

「胡旋女」の寓意―光源氏と清盛と　　加藤洋介氏

『続教訓抄』伝本考　　荒木　浩氏

夢を見ることを忘れた頃に―安西法師の奇蹟―　　中原香苗氏

大覚寺統における撰集下命をめぐって　　福田安典氏

―鎌倉中・後期勅撰和歌集制度史試論―　　村山　識氏

伊井春樹先生のごあいさつ

閉会の辞　　荒木　浩氏

「胡旋女」の寓意—光源氏と清盛と

大阪大学　荒木　浩

『白氏文集』新楽府の一篇「胡旋女」は、都にもたらされた胡旋舞をする女の描写によそえて、玄宗皇帝をめぐる、安禄山と楊貴妃の背信をほのめかし、時世を諷諭するものである。その背信の寓意は、安禄山と楊貴妃密通説の由縁となったとも謂われる。

かつて述べたように、玄宗皇帝・楊貴妃・安禄山と桐壺帝・藤壺・光源氏というそれぞれの三角形が、いずれも無知な様子の帝からの、善意で等値の寵愛を前提にした義母と義子との不倫の密通という構造を類似させるものであるならば、「胡旋女」の表象する世界は、『源氏物語』を理解する上できわめて重要な要素である。紫式部が「新楽府」に精通し、『源氏物語』のもっとも本質的な読者であった中宮彰子にそれを教示する立場にあったこともまた、『紫式部日記』に明らかであるからである。

逆に、『源氏物語』から「胡旋女」の構図が彷彿とする場面がある。「紅葉賀」の青海波試楽の場面である。三田村雅子氏は当該部を「舞人光源氏が藤壺に寄せる不逞な思いを込めて舞を舞い、藤壺の腹の子を我が子だと確信する」、「青海波は、光源氏の禁断の野望の実現に向けての輝かしい予祝に変貌しているのである。光源氏と藤壺のひそやかな胸の中だけでは……」（「青海波再演—「記憶」の中の源氏物語—」『源氏研究』五）と読むが、それはまさしく「胡旋女」の世界である。この青海波の場面こそ、作品内的にも繰り返し語られまた想起される『源氏物語』最重要の場面の一つであった。

ただしそれは、いわば〈秘められた寓意〉であった。その寓意は、光源氏と安禄山という、容貌と出自に於いて対極の、光源氏の謀反性をあらわにする。桐壺巻が『長恨歌』の依拠性の中で空白をもうけ、まさにその部分にこそ、決定的な寓意が潜在していたように、紅葉賀巻でも本文は明示的には「胡旋女」を引用することはなかった。

「紅葉賀」の青海波は、のちに『源氏物語』自体を先例として、五十賀の場で白河院、鳥羽、後白河と受け継がれる。後白河の折には、平清盛の孫、維盛が舞い、『安元御賀記』『平家公達草紙』『建礼門院右京大夫集』などは、それを『源氏物語』に擬えて語ろうとするのである。

清盛はまた、『彦火々出見尊絵巻』をめぐって、後白河院とともに興味深い『源氏物語』世界の枠組みの中に所在する、とされる。清盛に潜在する白河院皇胤説というおおけなき秘密の伝承もまた、清盛を『源氏物語』世界の主人公たちとのアナロジーで捉える視点を提供する。

その清盛こそ、源通親を語り手とする『高倉院厳島御幸記』において、「胡旋女」の安禄山に引き当てられる。退位直後の高倉院を玄宗に比定し、清盛の娘徳子が楊貴妃に擬えられる構造となる。楊貴妃は安禄山の義母であったが、『厳島御幸記』では、その親子関係が逆転して父・清盛と娘・徳子の形象に転じているところも重要である。

「紅葉賀」の試楽に於いて、青海波の舞は決して安泰な時代の予祝ではなかった。「春宮の女御」（弘徽殿）が光源氏を評した「ゆゆし」という語は、いわば「語脈」として『源氏物語』の未来を撃つ。アンビバレントな盛儀であった青海波所演は、しかしその後の白河・鳥羽・後白河の先蹤としては、まごう事なきハレの場、他ならぬ「賀」としてのみ表象される。『源氏物語』盛行の発端とされる「康和」の時代以後、物語世界の深層は封じられたかのように、『源氏』は、晴れやかな、そしていずれ重厚なカノンとして現前する。

如上、「胡旋女」をめぐる寓意の諸相と円環を、古代から中世へ、通観する視点の中で把捉し、文学史の一隅を照らし出せれば、と所期する次第である。

参考文献

・拙稿「玄宗・楊貴妃・安禄山と桐壺帝・藤壺・光源氏の寓意―続古事談から見る源氏物語―」（『詞林』三六、二〇〇四年一〇月）、拙著『日本文学　二重の顔』第二章（大阪大学出版会、二〇〇七年）など。
・静永健『白居易「諷諭詩」の研究』（勉誠出版、二〇〇〇年）
・増田欣『中世文藝比較文学論考』（汲古書院、二〇〇二年）
・高橋昌明『平清盛　福原の夢』（講談社選書メチエ、二〇〇七年）
・堀淳一「青海波選曲の理由―紅葉賀での上演に至るまで―」（『中古文学』創立三十周年記念号、一九九七年三月）、「後白河院五十賀における舞楽青海波―『玉葉』の視線から―」（『古代中世文学論考』三、一九九九年一〇月）
・伊井春樹『物語の展開と和歌資料』（風間書房、二〇〇三年）
・小川剛生「『高倉院厳島御幸記』をめぐって」（『明月記研究』九、二〇〇四年十二月）

付記　本発表の前半部分は、その後「『胡旋女』の寓意―『源氏物語』の青海波をめぐって」と題して『白居易研究年報』第九号（勉誠出版、二〇〇八年九月刊行）に成稿化した。後半部については、別稿を期したい。

『続教訓抄』伝本考

神戸学院大学　中原　香苗

南都興福寺属の楽人狛朝葛によって著された『続教訓抄』（文永七年（一二七〇）以降成立）は、祖父近真の『教訓抄』（天福元（一二三三）年）にならって撰述された総合的楽書である。

本書には、音楽に関わるもののほか、多くの説話や南都諸大寺の縁起、「六道」に関わる記述など、種々の内容が記されている。本書の伝承と『江談抄』や『宝物集』『古事談』『十訓抄』『古今著聞集』などの説話集との関連が説かれ[1]、引用文献に関しても、幼学書『童子教』[2]、朗詠注[3]、釈信救撰『白氏新楽府略意』及び南都の成唯識論の論抄『鏡水抄』などが指摘されている[4]。さらには、講式と共通の文辞が見られるとの指摘もある[5]。こうしたことからすれば、本書は中世の諸分野と関わりをもち、中世文化を考えるうえで重要な意義をもつものといえよう。

このような重要性に比して、伝本研究などの基礎研究は、ほとんどなされていない。『日本古典全集』に本文が翻刻されているものの、解題によれば、その底本は明治期に邨岡（村岡）良弼が水戸彰考館蔵本を写し、楽人多氏所蔵の本によって対校したものを、邨岡の門人清水文雄が影写して、さらに上野帝国図書館本によって比校したものであるという。そこに数種の伝本を加えて対校したものが、日本古典全集本なのである。日本古典全集本の本文は、こうした複雑な過程を経て校訂されたものであり、研究に用いるに際しては注意を要しよう。

『日本古典音楽文献解題』に指摘されるごとく[6]、『続教訓抄』には完本が現存しないため、もともとの巻数などは不明である。日本古典全集本には現存本文が網羅されているものの、本来一具であったはずの巻が分割されていたり[7]、『教訓抄』などからの記事の混入もみられる。つまり、現存『続教訓抄』の本文は錯綜した状態にあるといえるのである。

『続教訓抄』の現存最古の写本としては、現在重要文化財に指定されている曼殊院蔵本がある。この本は、明徳三年（一三九二）から四年（一三九三）にかけて笙を家業とした楽人豊原量秋によって書写されたもので、「『続教訓鈔』の現存最古本として流布本の祖本と認められて[8]」いるものである。この本に関しては、現在までほとんど検討されていないのであるが[9]、これを調べると、『教訓鈔』の混入などは、実は、曼殊院本が書写されていく過程で生じたことがわかる。

本発表では、『続教訓抄』の基礎研究として、まずは最古の伝本である曼殊院本を検討し、日本古典全集本にみられる

巻の分割や『教訓抄』よりの混入などが曼殊院本に由来することを確認した。

あわせて、発表者による現在までの『続教訓抄』伝本調査の結果をふまえて、伝本相互の関係についても考察をおこない、伝本系統としては、曼殊院本をもととしたと思われるもの、彰考館に所蔵された写本をもととしたもの、内容が十五冊に分割されているものなどが想定されることを報告した。

注

(1)稲垣泰一氏「『続教訓鈔』と中世説話集」(『説話』七、昭和五十八年)、今野達氏「続教訓抄と宝物集―宝物集伝流考補遺―」(『今野達説話文学論集』勉誠出版、平成二十年、初出　昭和五十六年)。

(2)今野達氏「童子教の成立と注好選集―古教訓から説話集への一パターン―」(注1前掲書所収、初出　昭和五十五年)。

(3)黒田彰氏「長谷雄草紙考―草子と朗詠注―」(『中世説話の文学史的環境』和泉書院、昭和六十二年)

(4)牧野和夫氏「中世の学問(注釈)の一隅」「中世における仏典注疏類受容の一形態―『鏡水抄』のこと―」(『中世の説話と学問』和泉書院、平成三年)

(5)菅野扶美氏「音楽講式について」(『国語と国文学』六四―八、昭和六十二年八月)。

(6)「続教訓鈔」の項、福島和夫氏執筆(講談社、昭和六十二年)。

(7)第一〇・一一冊、第一三・一四冊。

(8)『新指定重要文化財』七(毎日新聞社、昭和五十六年)。

(9)東京大学史料編纂所に写真が収められており、岩橋小彌太氏「洛北曼殊院の『続教訓抄』について」(『日本演劇史論叢』、巧藝社、昭和十二年)が、曼殊院本の概要について述べている。

大覚寺統における勅撰集下命をめぐって
―鎌倉中・後期勅撰和歌集制度史試論―

本学大学院博士後期課程　村山　識

発表者が、この発表を端緒として考えてゆきたいのは、為家を祖として為氏・為世以下に継承されてゆく二条家撰者による勅撰集(以下「二条家撰集」)が、いかなる歴史的過程を辿ったのか、またそれらはどのように位置付けられるべきものであるのか、という問題である。

鎌倉中・後期勅撰集に関する先行研究において、これらの撰集は、さほど注目されてきたわけではない。しかし、量的にも、また二条家当主によって代々撰集されたという連続性を考えても、二条家撰集がこの時代の勅撰集の主軸であり、これらの撰集を抜きにして、鎌倉中・後期における勅撰集を考えることは困難であろう。

本発表においては、その二条家撰集を、結果としてはすべ

て下命することとなった、大覚寺統における撰集下命の慣例的、制度的な面を、後嵯峨院に遡り考察することにより、二条家撰集を考える上での基礎的な部分を構築することを試みた。

後嵯峨院の時代から鎌倉幕府滅亡までの約九十年間に、『続後撰集』から『続後拾遺集』までの七つもの勅撰集が編まれた。田村柳壱は、この頻繁な撰集事業について、撰集を「王朝聖代にも比すべき善政の記念碑」と考えた治天の君たちが直面していた「皇統迭立」という対立構造と、為家と反御子左派、二条家と京極家という歌壇・御子左家における分裂・抗争という事態の二つの要因により、撰集が促されたとする（「和歌の消長」（『岩波講座　日本文学史　第五巻』、岩波書店、一九九五年十一月）。

田村の見解は、おおよそ認められるものではあるが、多少の問題も残している。

それは、『続古今集』については、亀山天皇即位直前に為家に後嵯峨院の諮問が下り（「為家卿続古今和歌集撰進覚書」）、また亀山院政開始直後に、為家が為氏を勅撰集撰者に推薦する（「延慶両卿訴陳状」）というように、特に皇統における対立構造が表面化する以前から、既に、撰集の下命時期が、即位や院政開始と密接に関連すると見られることである。

このことを考えると、即位や治天の君就任などを契機として勅撰集が企画・下命されるという慣習・制度は、その理念上の意義付けはともかく、皇統や歌壇における対立には大きく関わらず、後嵯峨院の時代をその端緒とすると考えた方が自然であろう。また、撰集の撰歌資料としての「応製百首」が、『続後撰集』のための『宝治百首』以降、定着してゆくことなども考え合わせると、特に大覚寺統・二条家撰者による撰集の制度的な面は、後嵯峨院から亀山院の頃に整えられ、以後に受け継がれたと見て良いだろう。

このような緩やかな制度に則り、撰集の下命が行われていたと考えた上で、各撰集における大覚寺統下命者と二条家選者の関係性を考察すると、必ずしも密接かつ均一なものとばかりはいえず、それぞれに考察の余地を残している。それらを考えることにより、今後、二条家撰集の諸相を明らかにしてゆきたいと考えている。